

宮城県文化財調査報告書第 42 集

# 宮城県文化財発掘調査略報

(昭和 50 年度分)

昭和 51 年 3 月

宮城県教育委員会

## 序

近年、経済の高度成長による各種開発事業の急速な進展や、社会経済の急激な変化に伴う生活様式の変ぼうなどにより、文化財保護に関して種々の問題が提起されております。私たちが祖先から継承した文化遺産がともすると破壊され、あるいは湮滅にさらされる例も少くない現況にあります。

このような事態に対処するに当たって、関係者・県民各位の深い御理解と御協力により、本県の文化財保護の体制が次第に確立の方向にあることは感謝にたえません。

また、全国的に見ても開発と文化財の保存をいかに調整するかという問題を投げかけられている例が少なくなく、文化財保護行政をいかに適正に推進するかは、緊急かつ重要な課題であるといえます。

宮城県教育委員会では、本年度も文化財保護行政の一環として9遺跡の発掘調査を実施し、特に、東北自動車道関係遺跡の古川市宮沢遺跡では、これまでにない大規模な古代城柵跡の遺構が発見されるという大きな成果を挙げることができました。本報告書は、それらに関する調査の概略を収録したものです。

ここに、本書を上梓するに当たり、御尽力と御協力をいただきました関係各位に対し、厚く御礼を申しあげます。

昭和51年3月

宮城県教育委員会

教育長 津 軽 芳 三 郎

## 例　　言

- 本書は昭和50年度東北自動車道関係遺跡（1遺跡）、東北新幹線関係遺跡（5遺跡）の調査内容を簡略にまとめたものと、宮城県内一般関係遺跡の一覧を掲載したものである。  
後日、正式な調査報告書を刊行する予定である。
- 本書収録の図画、写真等は最小限にとどめた。
- 一般関係遺跡の一部を除き、東北自動車道関係遺跡の発掘調査は県文化財保護課と古川市社会教育課が、その他の遺跡については県文化財保護課が担当し、各学校職員、学生補助員の方々の協力をいたいた。
- 本書の執筆・編集、図版等の作成および内容の検討については、県文化財保護課の下記の職員並びに旧職員が全員で担当した。

### 調査第一係

課長	千葉与一郎	後藤 勝彦	調査第二係 係長	齊藤 良治	古川市派遣職員
技術主幹兼係長					
副参事	村上 正	技術主査 高橋 多吉	技術主査 佐々木茂樹	技師 白鳥 良一	
課長補佐	大石 正己	" "	早坂 春一	技師 加藤 道男	" 鈴木惣之助
総務係 係長	桜井 雄二	" "	平沢英二郎	" 丹羽 茂	" 高橋 守克
主事	矢口セツ子	技師	小井川和夫	" 後藤 良	" 齊藤 吉弘
" 佐藤 博重	"	佐々木安彦	" 佐藤 好一		
補助員 山崎くみ子	"	阿部 恵	" 真山 悟		
" 保科 富子	嘱託	熊谷 幹男	嘱託 中島 直		
管理係 扇 正人	"	清野俊太朗	" 手塚 均		
主幹兼係長					
主事 佐藤 信子	事務補助員 伊藤 玲子				
" 渡辺 和彦	" 若部 洋子				
補助員 久保千賀子					
保護協会書記 安藤マサ子					

---

### 旧職員

西川 十郎 (課長)	宮崎 敬典 (技術)	芳賀 寿幸 (嘱託)
氏家和典 (技術主幹兼 調査第一係長)	恵美 昌之 (嘱託)	森 貞喜 ( " )
佐藤はちえ (管理係主事)	柳田 俊雄 ( " )	林 和男 ( " )
小笠原 任 (総務係主事)	後藤 幸雄 ( " )	

## 目 次

### I 東北自動車関係遺跡

- (1) 宮沢遺跡 ..... 3

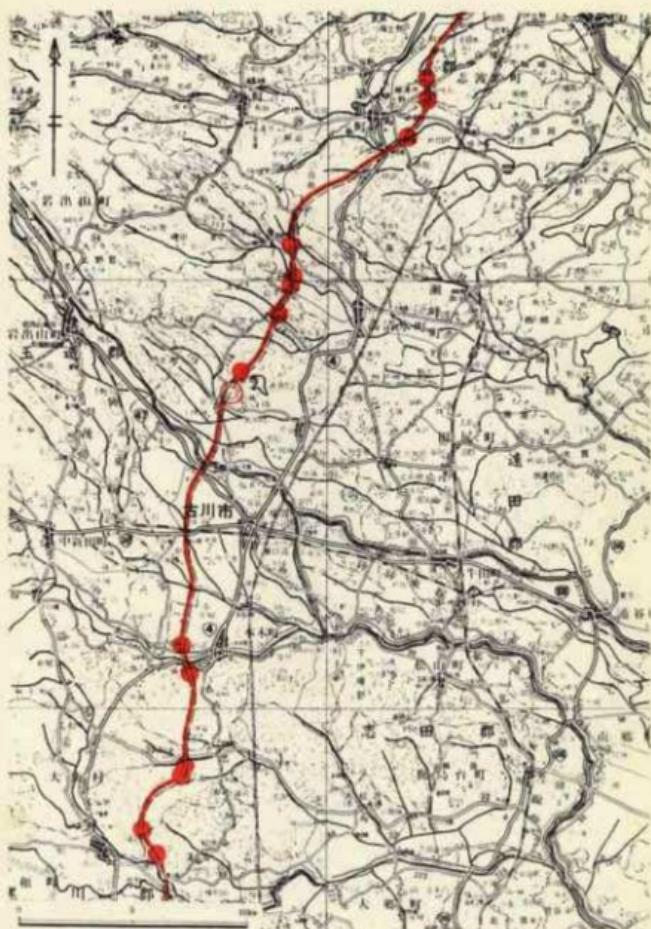
### II 東北新幹線関係遺跡

- (1) 内親引田遺跡 ..... 23  
(2) 道上遺跡 ..... 27  
(3) 清水遺跡 ..... 31  
(4) 留沼遺跡 ..... 41  
(5) 八沢要害遺跡 ..... 45

### III 一般関係遺跡

- 一般関係遺跡位置図 ..... 50  
一般関係調査遺跡一覧表 ..... 51

## I 東北自動車道関係遺跡



東北自動車道関係道路位置図 (●印は昭和40年度までの既存道路)

# (1) 宮 沢 遺 跡

— 愛宕山地区（第2次調査）・川熊・長者原地区 —

調査主体：宮城県教育委員会

古川市教育委員会

調査担当：宮城県教育会文化財保護課

古川市教育委員会社会教育課

遺跡所在地：古川市宮沢・川熊・長岡

調査期間：昭50年4月17日～12月17日

調査面積：64,918m<sup>2</sup>

発掘面積：18,430m<sup>2</sup>

遺跡記号：A Z

協力機関：宮城県東北歴史資料館

宮城県多賀城市調査研究所

協力・参加者

金野 正（宮城県築館女子高等学校教諭）

遠藤 久七（丸森町立大内小学校伊手分校教諭）

渋谷 勝磨（三本木町立三本木中学校主事）

遠藤 智一（岩出山町立真山中学校教諭）

佐藤 成（仙台市立上杉通小学校教諭）

新庄屋元晴（村田町立村田第一中学校教諭）

宮崎 敬典（泉市立向陽台小学校教諭）

青沼 一民（宮城県伊具高等学校主事）

一条 孝夫（塩釜市立浦戸第二小学校教諭）

遊佐 五郎（気仙沼市立松岩小学校教諭）

千葉 宗久（河北町立飯野川小学校教諭）

太田 昭夫（女川町立第二小学校教諭）

宮城県古川高等学校郷土研究部

笹原吉右衛門， 笹原 久（地元地権者）



1. 宮沢遺跡 2. 柄木橋横穴群 3. 大吉山尻宮跡 4. 舞招遺跡 5. 青琴古墳

#### 四、造跡位置圖

## I 位置と立地

遺跡は大崎平野北部の古川市宮沢を中心に川熊・長岡にかけて所在し、奥羽山脈から東に張り出した長岡丘陵に立地する。遺跡内には標高45m～60m程度のいくつかの小丘陵と、それを刻む小谷が含まれている。

遺跡が立地する丘陵の東側には化女沼がある。南麓には小林・宮沢・川熊・荒谷などの集落が並んでおり、さらにその南を江合川（荒雄川）が流れている。

## II 調査の経過

本遺跡は昭和47年6月に行なわれた東北自動車道の路線にかかる遺跡分布調査において、土師器・須恵器の散布地として発見され、「愛宕山遺跡」として登録された。

昭和49年度の第1次調査は、東北自動車道の路線にかかる約15,000m<sup>2</sup>を調査対象とした。その結果、縄文時代（晩期）、弥生時代（中・後期）の遺物、古代の土壙状遺構（2本）・掘立柱建物跡（1棟）・竪穴住居跡（3軒）などの遺構が発見され、本遺跡が縄文時代から平安時代にかけての複合遺跡であることが明らかになった。

その後、愛宕山遺跡にかかる路線敷の両側丘陵が、東北自動車道にかかる土取場に予定されたため、事前調査を実施することになった。昭和50年4月、第1次調査の未調査分と、土取予定地約54,000m<sup>2</sup>を対象に、第2次調査を開始した。第1次調査で検出された2本の土壙状遺構を精査した結果、一方は築地で他方は土壙であることが明らかになった。築地と土壙は並行して調査区域外にも延びており、踏査の結果、東西約1,400m・南北約850mのほぼ長方形にめぐることが判明し、本遺跡は古代城柵・官衙跡であろうと推定されるにいたった。そこでこの遺跡全体を大字名のひとつをとり「宮沢遺跡」とし、発掘地域を「富沢遺跡・愛宕山地区」と改めた。

昭和50年8月・「宮沢遺跡・川熊地区」の土壙状遺構に近接した場所を、土木業者が土取場として削平にとりかかったので、緊急に調査を行い、土壙、竪穴住居跡、土塙などの遺構を検出した。また、12月初旬になって東北自動車道の路線にかかる「宮沢遺跡・長者原地区」の一部の調査を実施した。

## III 調査結果

### 1. 愛宕山地区の発掘成果

#### A 発見遺構

##### (1) 築地

愛宕山地区で築地は2本検出されている。調査区の丘陵西斜面中腹をめぐり、東に延びる築地を第1築地とし、路線敷のすぐ西から始まり第1築地の外側を並行してめぐる築地を第2築地とした。

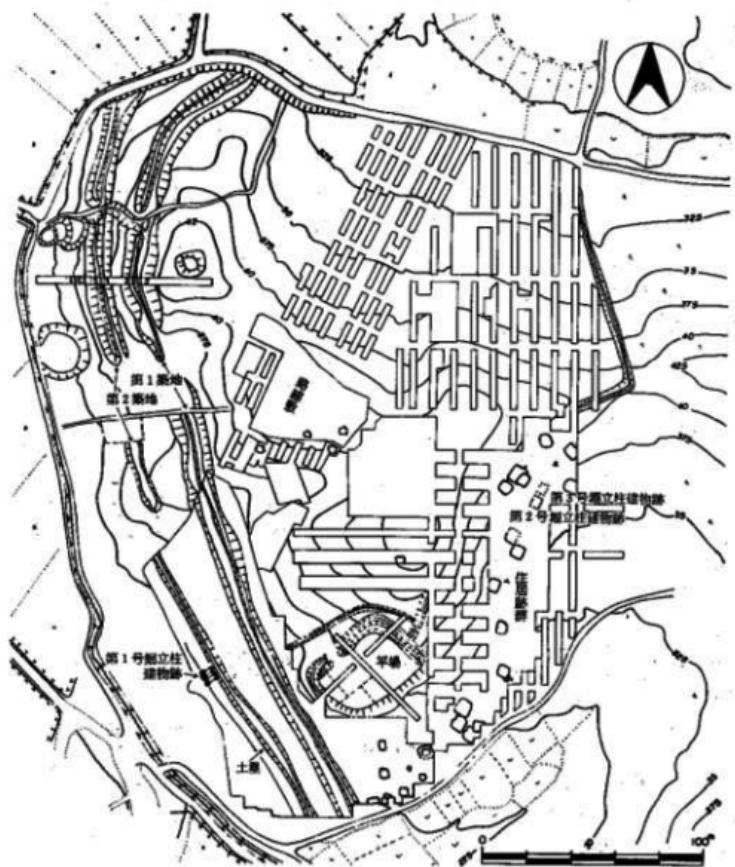


図2 受容山地区造構配図

第1築地は、旧表土（黒褐色土）と地山（褐色土）を幅約3.5m、高さ0.5mに削り出しで基壇とし、その上に築地本体をのせている。本体は厚さ3cm程の黒褐色土と褐色土を互層に積み上げ版築されている。版築土には、3m～5m単位で積み手の違いを確認することができた。本体は保存の良好な所で基底幅約2m、高さ0.5m遺存している。本体の両側には多数のピットが検出された。形、大きさ、配列などは不規則であるが対になるものは寄柱と考えられる。

基壇の両側には本体築成時の土取跡と思われる溝が存在し、堆積上及び底面から多数の土師器・須恵器が出土した。

第2築地について、調査区西側に幅3m×長さ78mのトレンチを設定し調査した。一部切断し、断面を観察した結果、版築による本体を確認した。急斜面を削り出し幅2m、高さ約0.3mの基壇を築成しその上に本体をのせている。現存する本体は幅約1.5m、高さ約0.4mであり、その内側には第1築地と同様な溝を伴っている。第1、第2築地の両端および溝中には築地の崩壊土が厚く堆積していたが瓦などの遺物はみられなかった。

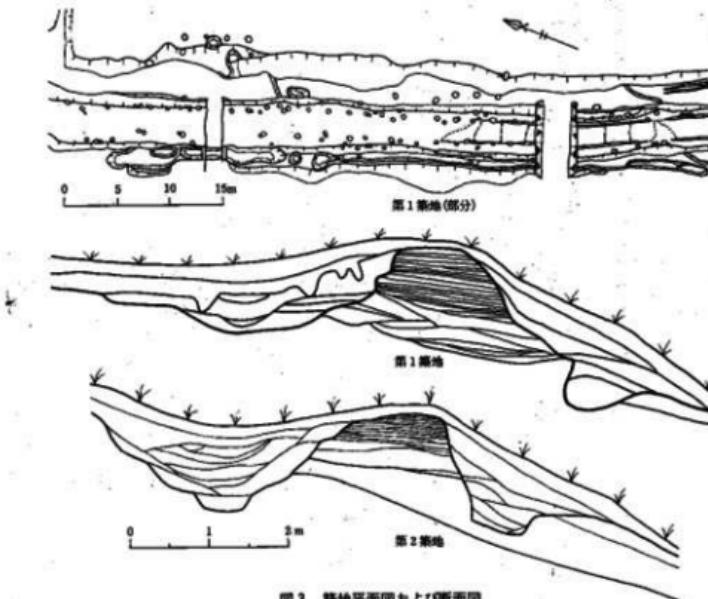


図3 築地平面図および断面図

## (2) 土壘

第2築地の外側にあり、丘陵裾部をめぐっている。旧表土と地山を削って幅約4.5mに削り出し、その上に地山の土を不規則に積み上げている。この土壘の内側に沿って、底面幅約2m、深さ約0.8mの逆台形をした堀が走る。堀からは第1築地に伴う溝から出土したものと同じ特徴をもつ土師器・須恵器が出土している。また土壘を跨いで掘立柱建物跡が検出された。

## (3) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は3棟検出されている。

第1号掘立柱建物跡、路線敷で土壘を跨ぐかたちで検出された。土壘の外側に4本、内側に4本の8本柱によって構成され、桁行柱間3間(5.20m)×梁行柱間1間(3.70m)である。柱の掘り方が一辺1~1.5mの方形、深さ約1mで旧表土上面から掘りこまれている。

第2・第3号掘立柱建物跡、調査区東南緩斜面の堅穴住居跡群の一角で近接して検出されたが、精査は実施していない。第2号掘立柱建物跡は桁行柱間3間(5.10m)×梁行柱間2間(4.20m)で、第3号掘立柱建物跡は桁行柱間3間(5.10m)×梁行柱間2間(4.20m)で、いずれも旧表土上面から掘りこまれている。

## (4) 堅穴住居跡

路線敷内と調査区東南緩斜面から32軒検出されている。そのうち精査の完了したものは路線敷内の4軒だけである。いずれも一辺が4m~6mほどの隅丸方形プランをもつ住居跡で、カマドを備えている。

調査区東南緩斜面からは28軒が密集して検出されたが、精査は実施していない。これらの住居跡は出土した遺物からみて「国分寺下層式」期および「表杉ノ入式」期のものである。

## B 発見遺物

### (1) 土師器と須恵器

出土遺物中最も多く、調査区全域から出土しているが、築地と土壘に伴う溝・堀、堅穴住居跡やその周辺からは特に多く出土している。土師器では、壺と甕の器種がみられる。壺ではロクロを使用しないもの(国分寺下層式)とロクロ使用のもの(表杉ノ入式)がある。須恵器・



図4 土壘断面図

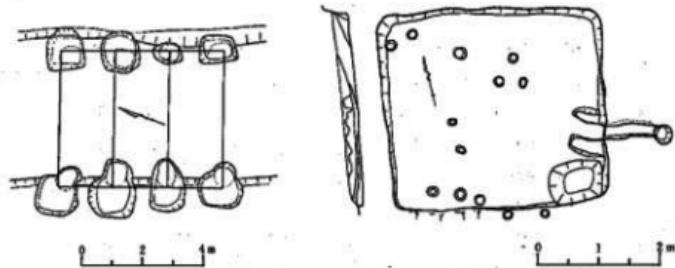
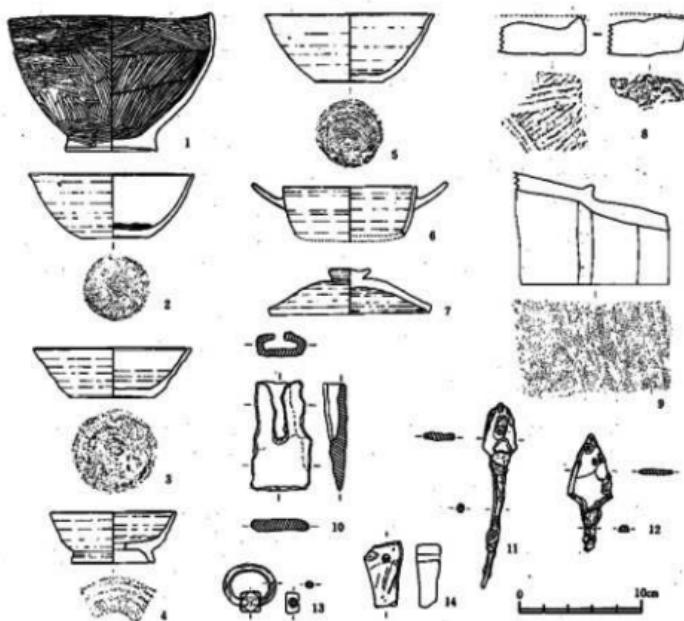


図5 第1号掘立柱建物跡と整穴住居跡



(1・2 土器部 3-7 瓦類部 8-9 瓦 10-12 鉄製品 13 金銅製金具 14 石器)

図6 愛宕山地区出土遺物

には壺（台付壺・双耳壺を含む）蓋・瓶（短頸瓶・広口瓶）甕類などの器種がある。壺の底部は回転ヘラ切り、回転糸切りの切離し痕跡を有するものが圧倒的で、静止糸切りと思われるものもある。

#### （2）縄袖陶器

住居跡堆積土の上部から2点出土している。1点は底部破片、他は体部破片で、同一個体と考えられる。器質は堅緻で、灰黒色の素地に濃緑釉が施されている。

#### （3）瓦

平瓦と丸瓦が約50点出土している。いずれも凹面に布目を有し、凸面には縦に繩叩目が付されている。灰青色を呈する硬質のものと、黄褐色の軟質のものがある。それらには軒平瓦が1点あり瓦当面と顎に山形文が付されている。

#### （4）金銅製金具

引き出しの把手状の金具で、環の部分は固定されておらず上下に動く。環は梢円形である。留金の部分は方形で、表裏の四隅を削ぎ落している。裏面は環を差しこんでから袋状に包み、中央には固定金具を取り付けたと思われる小孔が穿たれている。

#### （5）鉄鐸、鉄斧

鉄鐸は平根のもので茎が長い棒状のものである。鉄斧は最大幅が刃先にあり、柄挿入部は袋状になっている。

#### （6）砥石

短冊形のものが数点出土している。その中には上部中央に小孔が穿たれた携帯用のものがある。

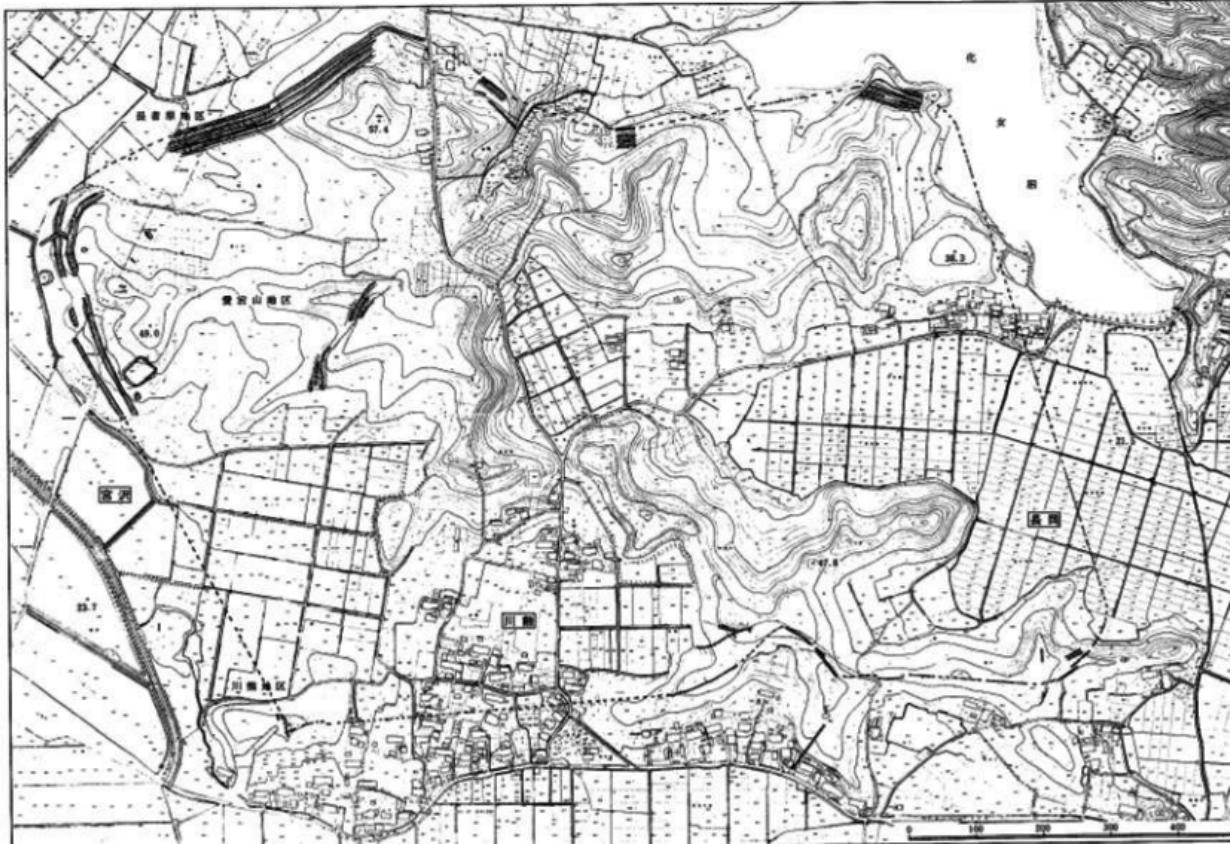
#### （7）その他

縄文時代、弥生時代の土器や石器が多数出土したのをはじめ、弥生時代の土製紡錘車、土製勾玉、中世のものとみられる懸垂孔のある和鏡、古銭（永楽通宝・寛永通宝）などが出土している。

## 2 踏査の結果

愛宕山地区で検出された築地や土壘は、古代の城柵・官衙に類する施設である可能性が強まり、調査区外にも延びることが予想されるに至った。そこで築地、土壘の延長部を踏査した結果、愛宕山地区を北西隅に、東西約1,400m・南北約850mの地域をほぼ長方形に区画する土壘状の高まりが発見された。各辺の状況は以下のとおりである。

（北辺） 北西隅から3～5本の並行する土壘状の高まりが、化女沼まで連続的に延びている。部分的には宅地や開田などによって削平されているところもあるが、全体に遺構の保存状況はきわめて良好である。



〈西辺〉 西辺の一部が第2次調査区域である。愛宕山地区の丘陵部（外郭線北西隅）で築地2本、土壙1本を検出している。同様の遺構は南西隅付近でも確認できる。中央部は大部分が開田されてしまい確認できない。

〈南辺〉 中央部は川熊の集落のため不明である。東半は一部館跡や水田などで破壊されているが、丘陵尾根上を1～3本の土壙状の高まりが走る。

〈東辺〉 化女沼および水田のため遺構の確認はできなかった。しかし、北辺の東端部は化女沼の汀線まで達しており、かつ、沼の対岸には東辺にある遺構がみられないことが確認された。化女沼の南端には元禄年間に堰堤が築かれており、それ以前は現在より水位が低かったと考えられるので、北東隅および東辺北半は現水面下に没している可能性がある。

以上により土壙状の高まりはほぼ四至にめぐることが明らかになった。このような土壙状の高まりは、愛宕山地区では築地や土壙であることが確認されていることから、他地域における土壙状の高まりも、築地や土壙跡と考えられる。しかもこの高まりは、数本並行してめぐっており、北辺や西辺では丘陵の裾部を、南辺では丘陵の尾根付近をめぐっている。

### 3 川熊地区の発掘成果

土木業者の土取工事にともない緊急調査を実施した。ここは十数年前に開田により削平されている。今回さらに土取場となり水田の表土が削平された状況の時点での調査である。調査の結果、土壙（1本）、堅穴住居跡（1軒）、土壙（2基）が検出された。土壙は地山を削り出して基底部とし、内側に底面幅約2mの堀を伴っている。この土壙は愛宕山地区で検出された土壙の延長線上にあって丘陵を横断し、南斜面の裾部へ延びる様相を呈しているが、開田による削平のため詳細は不明である。堅穴住居跡は土壙の外側で検出された。東壁と南壁が削平されていたが、ほぼ方形のプランをもつものと考えられる。堆積土および床面から40数点の土錐が出土している。土壙はいずれも摺鉢形で、1号土壙は径約3.9m、深さ約1.5m、2号土壙は約5m、深さ約2.5mである。両土壙の埋土からは、土師器・須恵器が出土している。

### 4 長者原地区の発掘成果

調査日程の関係から、土壙状の高まりを除いた平坦地約470m<sup>2</sup>の調査を実施したのみである。縄文土器・土師器片が数点出土している。

#### IV まとめ

これまで述べた調査結果をもとに、初めに考古学的な面から遺跡の性格と年代を考察したい。

本遺跡の性格を最もよく示す遺構は築地である。築地が方形にめぐるといったあり方は、古代城柵・官衙に一般的にみられるものであり、いくつかの丘陵をとり入れていることや、郭内に竪穴住居跡の密集する地域がある点で、多賀城や秋田城に類似する。また、土壘を跨いで建てられた掘立柱建物跡は、柱の掘り方の一辺が1m～1.5mと大きく明らかに古代のものと思われる。また、これらのことから、宮沢遺跡は古代の城柵・官衙跡とみるのが最も妥当であると考えられる。

山形文軒平瓦を含む布目瓦および縁軸陶器・金銅製金具・携帯用砥石などの出土もこれらの考え方を裏付けるものであろう。また、築地・土壘に伴う溝・堀や竪穴住居跡およびその周辺から出土した土師器や須恵器は、器形や製作技法からみて、8～10世紀のものであり、遺跡の開始年代は奈良時代に求めることができる。ただし、本遺跡を古代の城柵・官衙跡とみた場合、数本の築地や土壘が並行して外郭をめぐるといった点は、従来知られている城柵・官衙跡にはみられない特徴であり、もし仮にこれらの築地や土壘が同一時期のものであれば、あらたな類型を加えることになろう。

次に文献的な面から、宮沢遺跡が古代の陸奥国のかなる郡に属し、またどんな城柵に該当するかについて検討しておきたい。

本遺跡が所在するのは長岡丘陵の一部であり、また遺跡の東部が古川市長岡に含まれることから、古代の長岡郡との関連が想起される。

長岡という地名は、続日本紀宝亀11年2月21日条に「賊入長岡焼百姓家」と見られるが、正史ではすでに郡が成立している場合は「○○郡」と明記されていることからこれを長岡郡の初見とみることはできない。長岡郡の文献上の初見は、続日本紀延暦8年8月30日条の「其牡鹿。小田。新田。長岡。志田。玉造。富田。色麻。賀美。黒川等一十箇郡。」に求めることができる。したがって、長岡郡は、宝亀11年から延暦8年の間に成立したとみられる。長岡郡に関しては、その後「延喜式」「和名類聚抄」「拾芥抄」などに名があらわされており、少なくとも室町時代ごろまで存続したことが知られる。さらにこれらの資料には、長岡郡内の地名として長岡、湖木、小林、沢田、荒谷などが記されているが、これらの地名は現在、吉川市北部及び田尻町北西部にみられる地名に比定でき、しかもきわめて近接したまとまりを示している。したがって古代の長岡郡は現在の古川市長岡を中心として、その周辺に求められ、本遺跡も古代においては長岡郡に属していた時期があったとみることができる。ただし、長岡郡成立以前においては、他の郡に属していたと考えることも可能である。

文献上に現われる城柵・官衙で、奈良時代に宮城県内に所在したと考えられるのは、多賀城、

玉造柵、新田柵、牡鹿柵、色麻柵、桃生城、伊治城、覺鰐城などがあげられる。これらのうち現在までその位置・規模・施設などが明らかにされているのは、多賀城と桃生城だけである。他の城柵にはいくつかの擬定地があるが、所在地はいまだに決定していない。

所在地不明の城柵は、覺鰐城をのぞいてはいずれも古代の陸奥国の郡名が付されており、一応それぞれの郡に属していたと考えられるが、長岡郡成立以前は本遺跡が他郡に属していたことも考えられるが、したがって位置的にみて本遺跡が玉造柵、新田柵、伊治城のいずれかに該当する可能性もある。

覺鰐城については、齋岡長弼が「大日本地理志料」（明治36年初版）の中で、続日本紀宝龜11年2月2日、11条の記事を引用して、「覺鰐城は長岡の地に造営され、この時に長岡郡が成立した。」とする主旨の説を述べている。この齋岡説は遺跡などに關係なく、文献史料からのみ唱えたものだけに、古代の長岡郡内に宮沢遺跡の存在が確認された現在、改めて取り上げて検討する価値があろう。また、本遺跡は文献に名をとどめていない城柵、官衙の可能性も残されている。

本遺跡は今回はじめて存在が明らかにされたばかりである。この遺跡がもつ歴史的意義は将来のさらに精密な考古学的調査と文献的検討によって解明されることを期待したい。

参考文献：県教委「宮城県文化財発掘調査略報」県文化財調査報告書第40集一昭和50年一

県教委「宮城県宮沢遺跡の調査」考古学ジャーナルNo. 116一昭和50年一

県教委「宮城県古川市宮沢遺跡の調査」日本歴史第331号一昭和50年一



宮沢地区全景  
(西側より)



愛宕山地区全景  
(南側より)



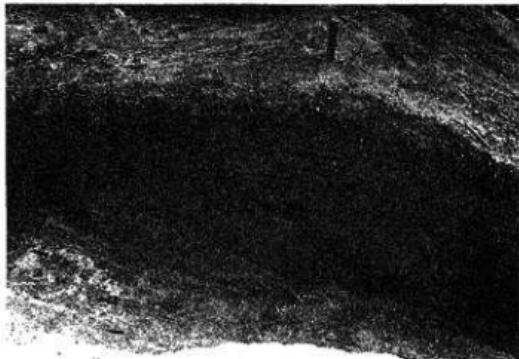
愛宕山地区北西隅  
農地・土壠の現状  
(西側より)



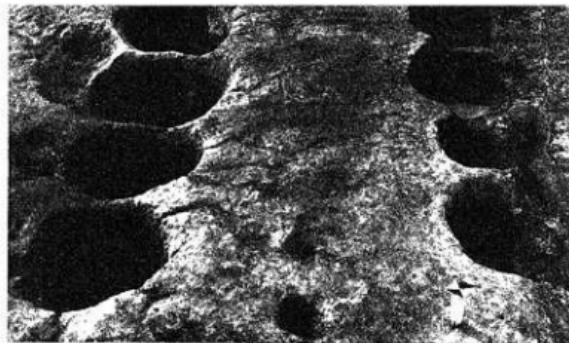
路線敷第1 犬地（部分）  
（東側より）



路線敷第1 土壌（部分）  
（西側より）



豊宕山地区西側  
第2 犬地断面



第1号石立柱建物跡  
(東面より)

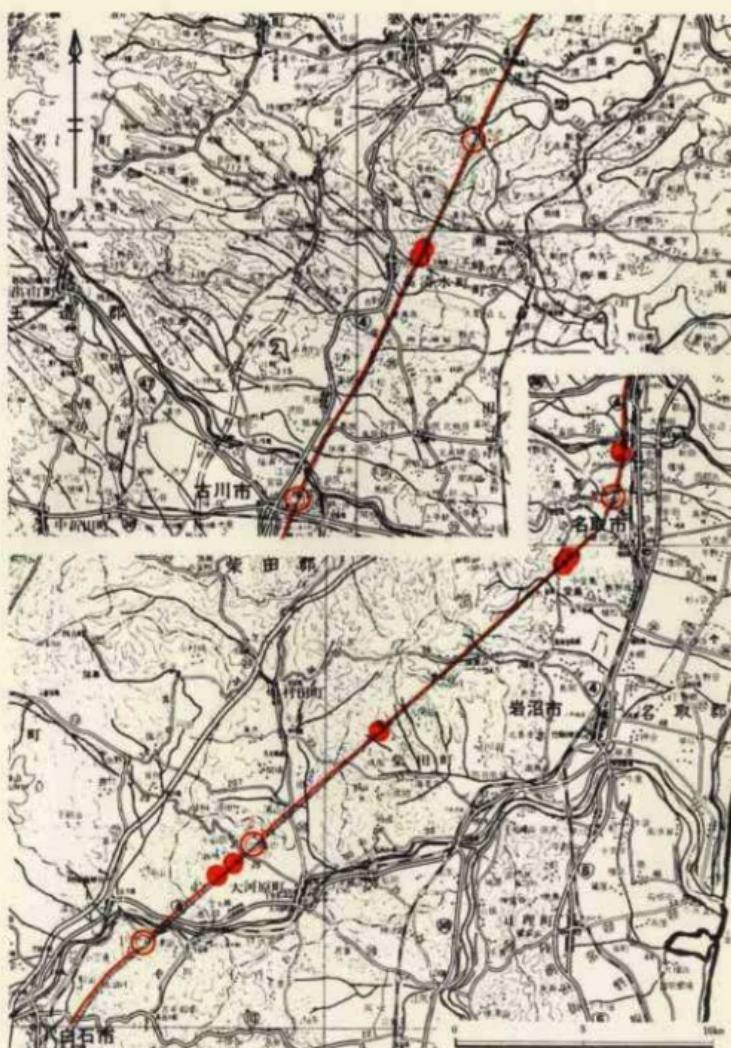


愛宕山地区住居跡群  
(南端より)



竪穴住居跡

## I 東北自動車道関係遺跡



東北新幹線関係施設位置図（●印は昭和49年度までの調査路線）

## 調査遺跡

調査主体者 宮城県教育委員会

日本国有鉄道仙台新幹線工事局

調査担当者 宮城県教育庁文化財保護課

遺跡番号	遺跡名	所在地	調査期間	収録ページ
1	内義引由 (第2次調査)	白石市内義字引由	昭和50年6月17日 ～ 6月19日	23
2	道上	柴田郡大河原町小山田字館前	昭和50年6月25日 ～ 7月2日	27
3	清水 (第2次調査)	名取市田高字清水	昭和50年4月7日 ～ 11月28日	31
4	留沼 (第2次調査)	古川市大柿字留沼	昭和50年8月1日 ～ 11月1日	41
5	八沢要害 (第2次調査)	栗原郡築館町八沢字要害	昭和50年4月7日 ～ 5月20日	45



(1) 内親引田遺跡

(第2次調査)

遺跡所在地：白石市内親字引田

調査期間：昭和50年6月17日～6月19日

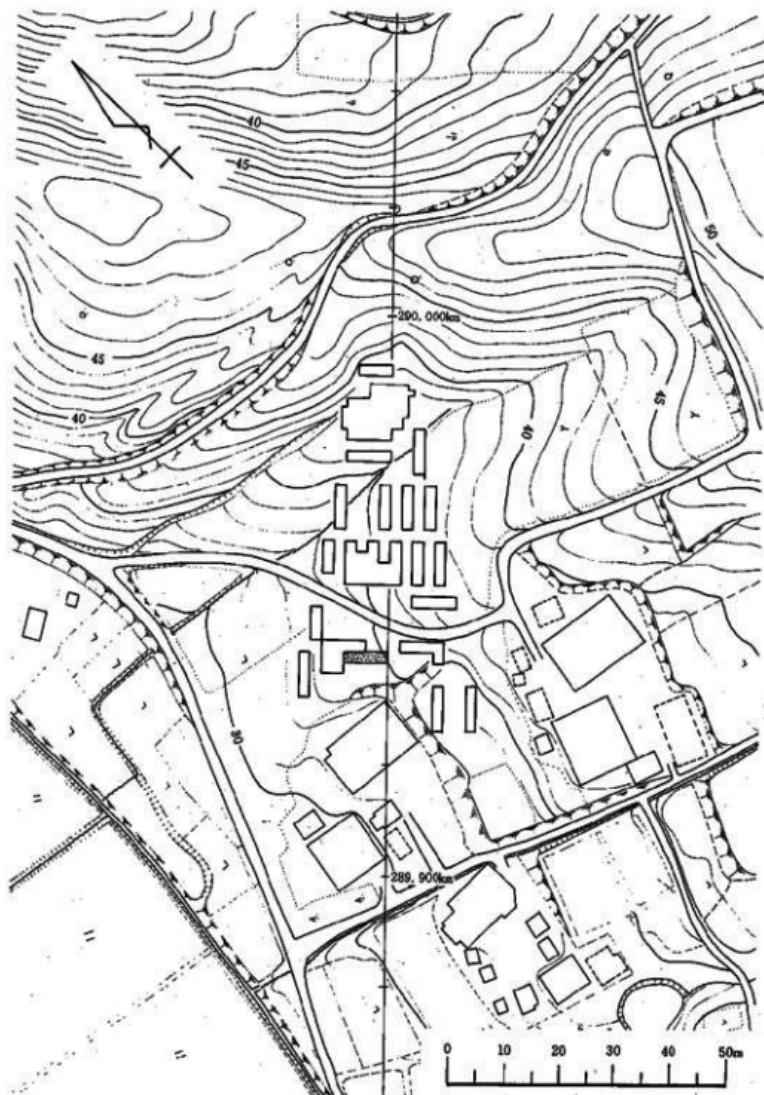
調査面積：750m<sup>2</sup>

発掘面積：16m<sup>2</sup>

遺跡記号：A R

協力機関：白石市教育委員会

協力参加者：佐藤庄一（山形県教育庁文化課）



遺跡地形図（□印は昭和47年度調査範囲）

## 1. 遺跡の立地

内親引田遺跡は、白石市街の北約 5.7 km、東北本線北白川駅西約 1.2 km の地点にある。遺跡の周囲は標高 200m 前後の丘陵に囲まれており、遺跡は東から延びる角田丘陵の一部が白石川に面した標高 35m 前後の西側斜面に立地する。

## 2. 調査の概要

第1次調査（昭和47年度）で路線敷内に平安時代の堅穴住居跡5軒を発見し、集落跡の広がりが注目されていたが、当時家屋の移転、竹林等の補償をめぐり調査を行えない部分があった。今年になって路線敷全城の調査可能な条件が整ったで第2次調査を実施した。

調査区は、民家移転地に近く、北側のトンネル工事影響もあって雑物が多いえに工事によって地形がだいぶ変形していた。そこで、第1次調査担当者の立会いの上、289.940km の杭を基準とし、L10.4 の幅杭を結ぶ線を基準線とし、南北 2m × 東西 8m のトレンチを設定した。

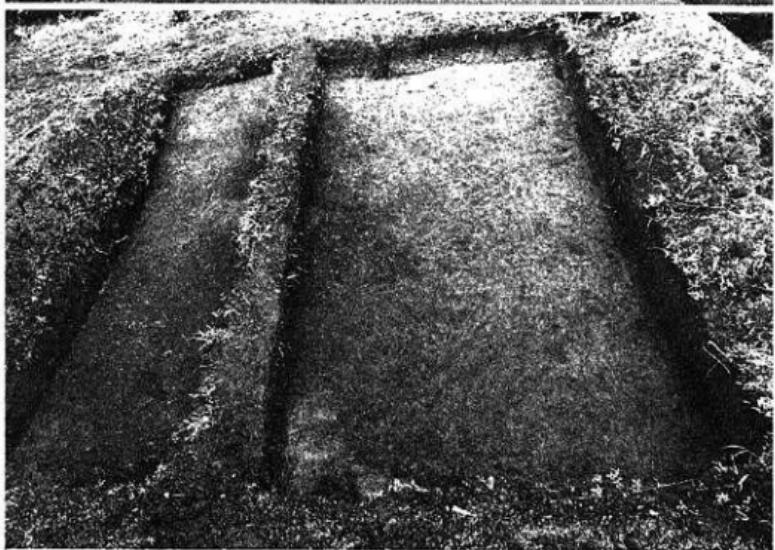
層序は、表土土層、表土下層、地山であり、表土から地山まで 40～50cm である。表土上層は大礫を含み、地山のブロックなど混入する層で、工事等による攪乱層である。表土下層は中疊を多少含み、黒褐色土でしまりはあまりない。この層から内面黒色処理された土師器破片 3 点が出土した。遺構は発見することができなかった。

## 2. まとめ

今回の調査は第1次調査の未調査地区を対象に実施したが、遺構を検出することはできなかつた。しかし、第1次調査では 5 軒の堅穴住居跡が発見されていることから、本遺跡は平安時代の集落跡と考えられ、路線敷およびその北西側畠地にも広がるものと思われる。

参考文献：県教委 「東北新幹線関係遺跡発掘調査報」

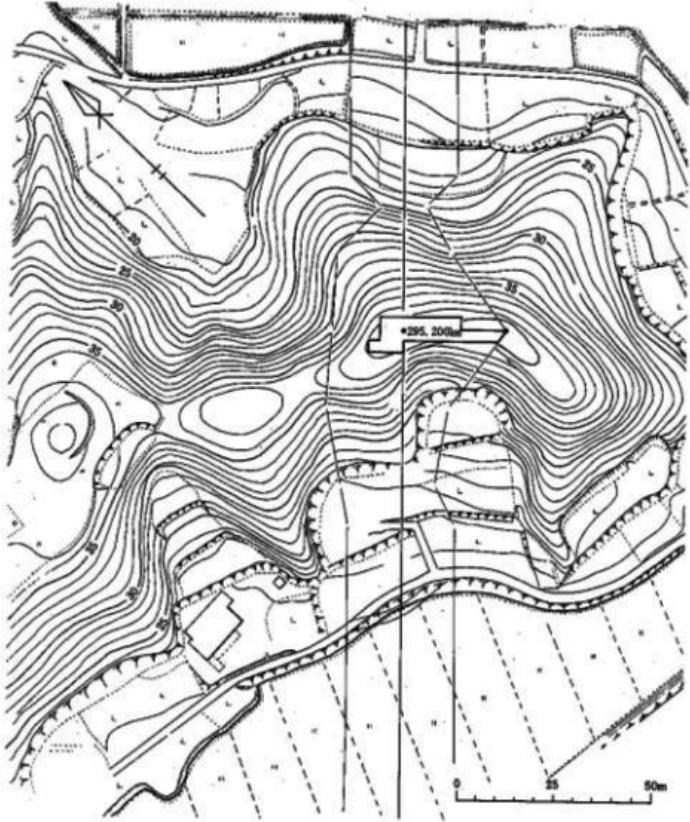
宮城県文化財調査報告書第 30 集－昭和48年－



上：遺跡遠景（東側より） 下：発掘状況

## (2) 道上遺跡

遺跡所在地：柴田郡大河原町小山田字館前  
調査期間：昭和50年6月25日～7月2日  
調査面積：600m<sup>2</sup>  
発掘面積：189m<sup>2</sup>  
遺跡記号：AQ  
協力機関：大河原町教育委員会



地勢地形図

## 1. 遺跡の立地

奥羽山脈から分岐して東に延びる標高100m内外の仙南丘陵は、大河原町の西方で藏王町と境するあたりから愛宕山丘陵となる。この丘陵の東端は、白石川とその支流荒川等の形成した沖積平野にのび、樹枝状をなしている。本遺跡はこれら丘陵のひとつで、標高約40mの通称館山に所在し、雑木林である丘頂部と水田面との比高差は約25mである。

## 2. 調査の概要

路線敷は東西に延びる丘陵部を南北に横断する。南・北両斜面は急峻で丘頂部に狭い平坦部がある。この平坦部に295.200kmの杭を基準にしてグリットを設定し、189m<sup>2</sup>を発掘した。

尾根上平坦部の覆土は浅く、腐葉土・凝灰岩質風化土などが堆積し、20~30cmで凝灰岩質の地山に達する。

この地山面で多数の小ピットを検出した。径20cm前後の円形のものであるが、なかには隅丸方形状のものもある。埋土は、凝灰岩質風化土であり、その中から遺物は発見できなかった。

## 3.まとめ

発掘区を含むこの丘陵(館山)一帯は、小山田城跡(註1)であると伝えられている。路線敷の約50m西側に比較的広い平場と考えられる平坦部がある。

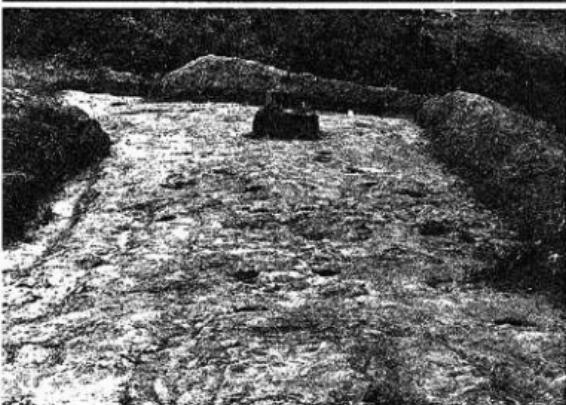
発掘調査の結果、出土遺物はなく、検出したピット群もその性格は不明であり、平坦部との関係を積極的に説明できる資料を得ることができなかった。

註1「仙台領古城書上」(小山田村)

「安永風土記御用書出」(小山田村)



遠路遠景（南側より）



発掘状況 1



発掘状況 2

### (3) 清水遺跡

(第2次調査)

遺跡所在地：名取市田高字清水

調査期間：昭和50年4月7日～11月28日

調査面積：6,400m<sup>2</sup>

発掘面積：3,500m<sup>2</sup>

遺跡記号：BU

協力機関：名取市教育委員会

協力・参加者：佐藤哲雄（東北学院大学卒業生）

門間孝子（東北学院大学卒業生）

柳瀬和幸（東北大学学生）

小山 純（宇都宮大学学生）

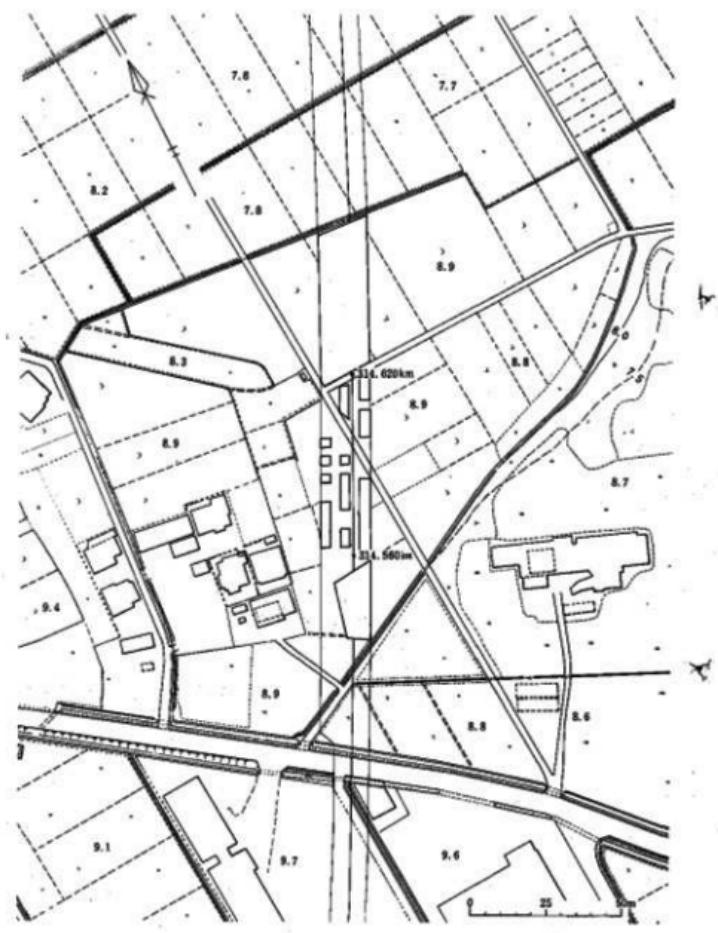
岩淵孝子（宇都宮大学学生）

斎藤康子（宇都宮大学学生）

篠原玲子（宇都宮大学学生）

名取高等学校郷土部有志

佐々木友二郎（地元地権者）



南区道路地形图



北区道路地形图

## 1 遺跡の立地

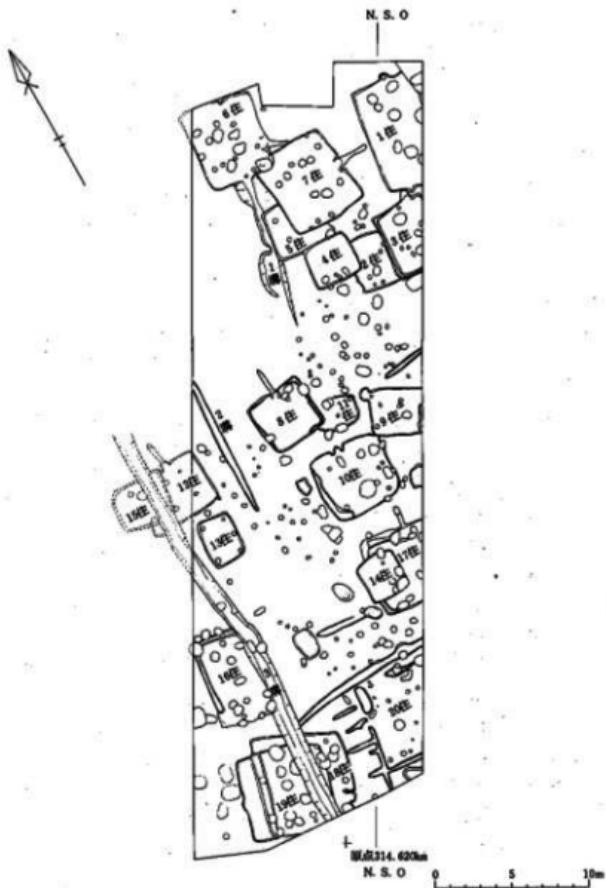
清水遺跡は、名取市の中心部から北北西約1.5km、仙台市との境にある。北には名取川・南には高館丘陵に源を発する増田川が流れる。遺跡はこの両河川が形成する沖積平野の微高地上に立地する。遺跡付近は、標高10m程度で畠、水田、果樹園等に利用されている。本市田高一帯には広範囲にわたり、土師器、須恵器片が散布している。

## 2 調査の概要

昭和49年度の第1次調査は冬季の降雪等のため遺構保全の意味から調査を中断し、今回第2次調査を実施した。路線敷にかかる遺跡の範囲は東西16m、南北600mに及んでいる。今回も第1次調査と同様に調査区中央の水田を境にして、北側区域16×150mを調査対象とし、約3500m<sup>2</sup>を発掘した。その結果、弥生時代から平安時代にかけての遺構や遺物が発見された。その概略は以下のとおりである。

**南区** 〈基本層序〉第1層暗褐色土（表土）、第2層黄褐色土、第3層暗褐色土、第4層黄褐色土である。遺構確認面は第3層上面である。〈竪穴住居跡〉全部で19軒検出された。これらの住居跡は大部分のものが重複している。平面プランが一辺4~5mの隅丸方形のものと長軸約6mの隅丸長方形のものがある。床面はほぼ平坦で、部分的に固い面をなしているものとやわらかな面をもつものがある。壁は床面から垂直に近い状態でたちあがるものとゆるやかな角度でたちあがるものがある。ほとんどの住居跡はカマドと煙道を有し、東ないし北向きに付設されており、なかには燃焼部側壁に石を使用しているものも認められる。柱穴は対角線上に4個あるものが一般的である。貯蔵穴、周溝のあるものはすくない。住居跡は出土遺物などから・古墳時代後期から平安時代にかけてのもので、そのうちの大部分は後者に属している。〈溝状遺構〉全部で3本発見された。幅1m、深さ0.6mの溝と幅0.3m前後、深さ0.2m前後の溝である。これらの溝は住居跡が営まれた後につくられたものである。その年代、性格、機能については不明である。〈土壙〉合計3基が検出された。掘り方の平面形はほぼ楕円形である。大きさは径約1m、深さ0.8mである。これらのド土壙の性格、機能については不明ではあるが、回転糸切りで切り離し手法をもつ土師器、須恵器の出土することから平安時代のものもある。

〈ピット群〉住居跡を縫うように円形と楕円形のピットが百数十個発見されている。その年代、性格等については不明である。〈出土遺物〉土師器（坏、壇、甕）、須恵器（坏、甕）、鉄製品（紡錘車、斧、鎌）・石製品（石包丁、紡錘車、砥石）、その他、重弁蓮華文軒丸瓦・丸玉、土錐がある。土師器・須恵器は製作技法上ロクロ形成のものが多い。



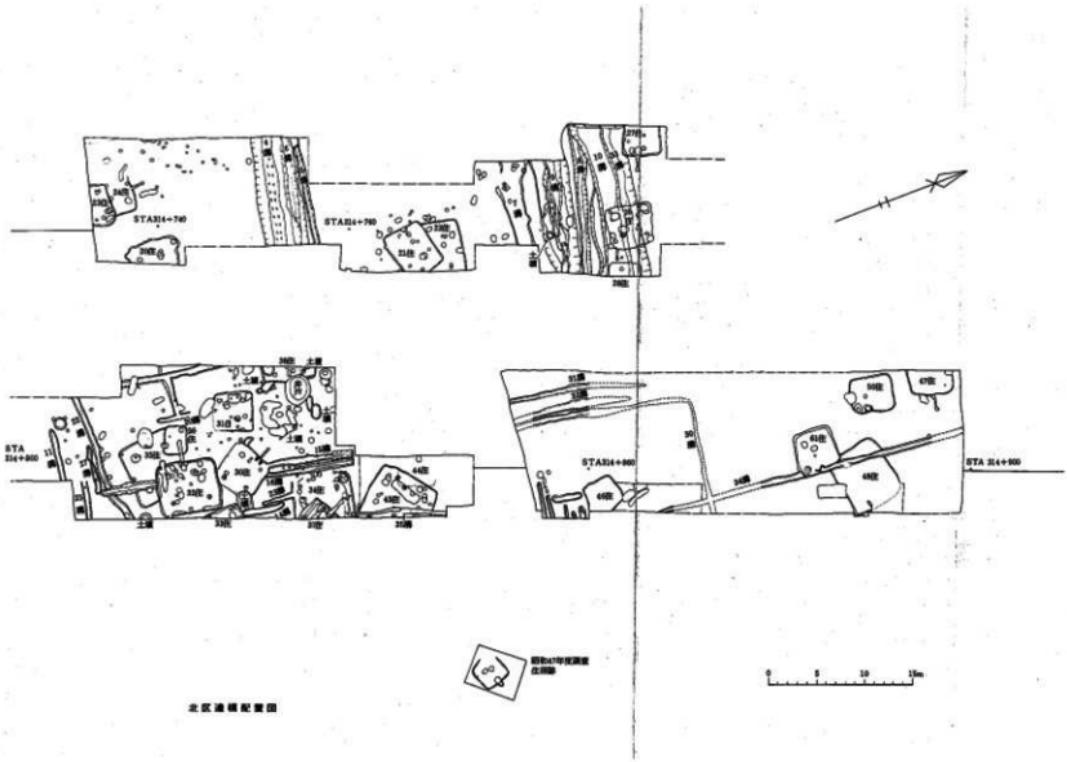
南区造情配図

**北区** 〈基本層序〉第1層暗褐色土(表土), 第2層暗褐色土, 第3層極暗褐色土, 第4層黃褐色土である。遺構確認面は第3層上面である。〈堅穴住居跡〉27軒検出されている。ほとんどの住居跡は重複して検出されている。平面プランは一辺4~5mの隅丸方形のものと長軸約7mの隅丸長方形のものがある。床面はほぼ平坦で、やわらかいものが多い。壁は床面からゆるやかな傾斜をもってたちあがる。住居跡内の施設として炉、カマドをもつものがある。カマドの向きは東ないし西である。カマドの焚口部に石を使用したものも認められる。柱穴は4本あるのが普通であるが、認められないものもある。貯蔵穴、周溝などをもつものもある。住居跡は、出土遺物などから古墳時代から平安時代にかけてのものであるが、奈良時代のものが多い。〈溝状遺構〉全部で30数本検出された。幅1.6~4.9m、深さ0.4~1.3mの大きい溝と幅・0.5m、深さ0.3m前後の小さい溝が検出されている。これらの溝の多くは、住居跡や他の溝と重複している。〈土壙〉11基ある。掘り方の平面形には円形や長楕円形のものがある。大きさは径0.7~1.5m、深さ0.2~0.6mである。これらの土壙は、出土遺物などから平安時代のものもあるが、大部分は年代、性格、機能等は不明である。〈その他の遺構〉井戸跡が1基発見された。平面形は楕円形で、大きさは上端で長径3.2m、短径2.6m、深さ約2.5mである。底面には河原石が認められた。埋土から土器片数点と小さな曲物片が出土している。この井戸跡は住居跡を切ってつくられていることから住居跡よりも新しい年代のものである。

〈出土遺物〉土師器(高壺・壺・壺・塼・甕・瓶)、須恵器(壺・壺・甕・鉢)、鉄製品(刀子・鐵)、石製模造品(勾玉・白玉・管玉)、その他土錐、丸玉、くぼみ石などがある。土師器、須恵器の製法技術はロクロ成形のものと非ロクロ成形のものがある。

### 3.まとめ

- (1) 本遺跡は名取川、増田川によって形成された自然堤防上に営まれた古墳時代から平安時代にかけての大集落であり、調査区はその一部である。
- (2) 住居跡は南区で平安時代のものが、北区では古墳時代・奈良時代のものが大部分である。これらの住居跡を比較すると南区にくらべて北区のものにやや大きいものが認められる。
- (3) カマドの設営方向に規則性が認められる。南区では東向きのものと北向きのものであり、北区では東向きのものとほぼ西向きのものにわけられる。北区には炉をもつ住居跡がある。
- (4) その他、多数の遺構が発見されているが、その性格や機能は不明であり、今後に検討すべき問題をのこしている。



(南区)



発掘区部分  
(北側より)

第8号住居跡



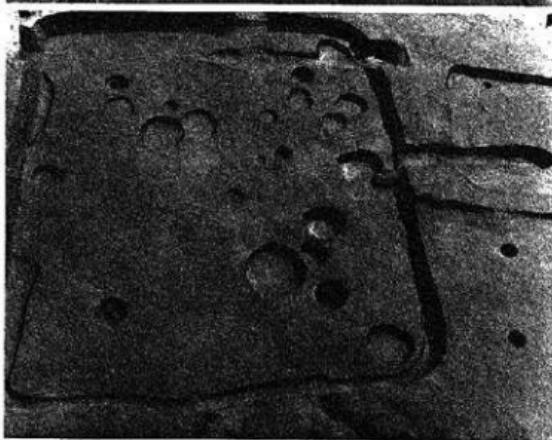
第15号住居跡  
遺物出土状況





(北区)

発掘区部分 (南側より)



第32号住居跡



第37号住居跡  
カマド内遺物出土状況

## (4) 留 沼 遺 跡

(第2次調査)

遺跡所在地：古川市大柿字留沼

調査期間：昭和50年8月1～11月1日

調査面積：1,696m<sup>2</sup>

発掘面積：900m<sup>2</sup>

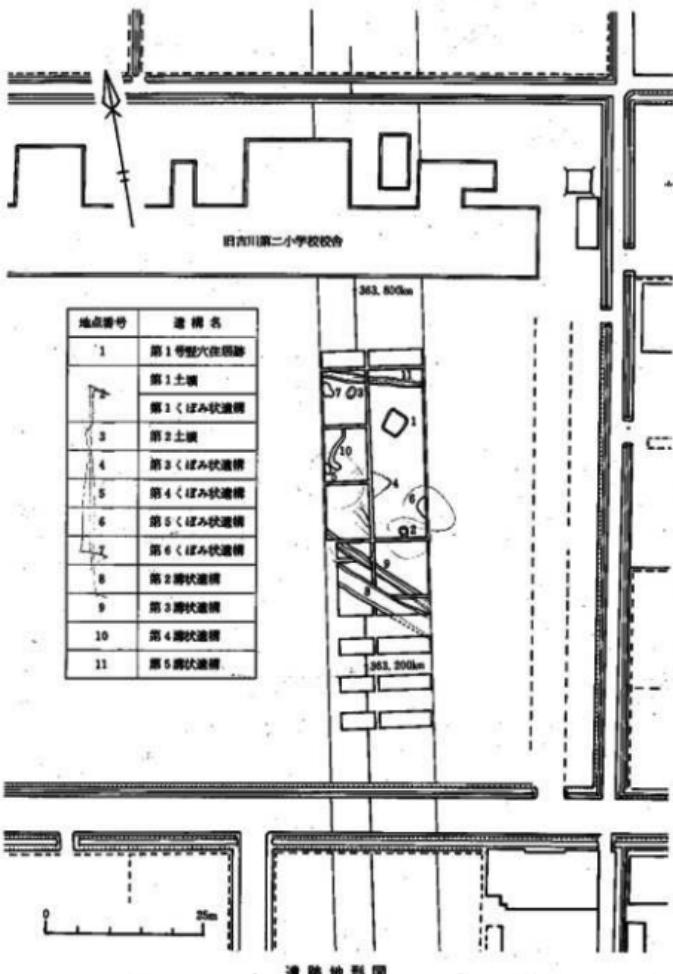
遺跡記号：BZ

協力機関：古川市教育委員会

古川市立第二小学校

協力・参加者：三宅宗議（宮城県古川工業高等学校教諭）

宮城県古川工業高等学校郷土研究部



## 1 遺跡の立地

留沼遺跡は、陸羽東線踏前古川駅の北西約1kmの市街地に位置し、大崎耕土を流れる江合川によって形成された自然堤防である微高地（標高約19m）上に立地している。

## 2 調査の概要

第1次調査は、遺跡が古川第二小学校の校庭として使用されていたため、限られた範囲しか調査できず、遺跡の性格を部分的に明らかにするにとどまった。その後、小学校の移転を待って、昭和50年8月から第2次調査を行ない、次のような結果を得た。

〔基本層序〕 第1層：暗褐色シルト層。第2層：黒褐色シルト層。第3層：淡黄色細砂質シルト層。第4層：浅黄色砂層。第5層：灰白色細砂層。第6層：褐灰色粘土質シルト層。第7層：明青灰色砂層。第3層と第4層から古墳時代前期の遺物が出土し、特に第4層とその上面に多い。

〔検出遺構〕 竪穴住居跡1軒。くぼみ状遺構5個所。土壙2基。溝状遺構4本などが検出された。これらの遺構は、第4層上面と第5層上面から確認された。

竪穴住居跡：長軸3.6m、短軸3.3mの規模をもつ長方形の住居跡である。現存壁の高さは全体的に約10cmで、立ちあがりは垂直に近い。壁面の一部は焼け焦げていた。床面は平坦で、その上に炭化物が全面にわたって敷きつめられた状態で検出された。精査の結果、この炭化物は、ワラ（稻）の炭化したもので、その厚さは約1cmであった。ワラの上部は黒く炭化していたが、下部の床面と接する部分は白い灰となっていた。床面に敷きつめられたこのワラの層に接して、多数の炭化材、古墳時代前期の古式土師器が出土している。柱穴、炉は検出できなかった。壁、床面のあり方・炭化材の遺存状況等から、本住居跡は火災によって焼失したものと考えられる。

くぼみ状遺構：長軸1～3mの規模をもつ不整円形のくぼみである。底面には炭化物が認められ、数点の完形土器がまとまって出土した。

土壙：長軸約1.5m、深さ約20cmの規模をもつ楕円形の遺構である。これらには、底面が硬く焼けているものと、壁面等に炭化物が貼りついた状態のものがある。

溝状遺構：確実に古墳時代のものと推定されるものは、第3号、第4号溝である。特に、第3号溝は、この溝を境として北側から遺物の出土が多く、遺跡集落の範囲を区画する溝かもしれない。

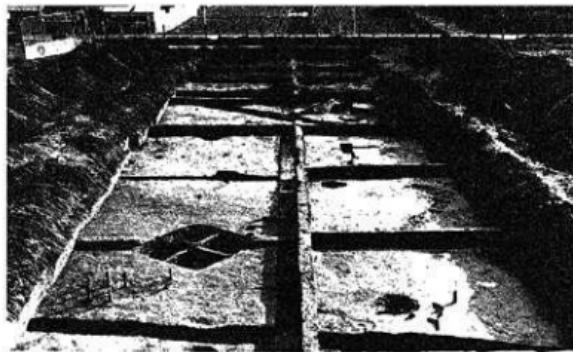
## 3まとめ

留沼遺跡は、自然堤防上に営まれた古墳時代前期の集落跡と考えられる。本遺跡で検出された竪穴住居跡のあり方は、当時の生活を考える上で、重要な資料を提供するものである。

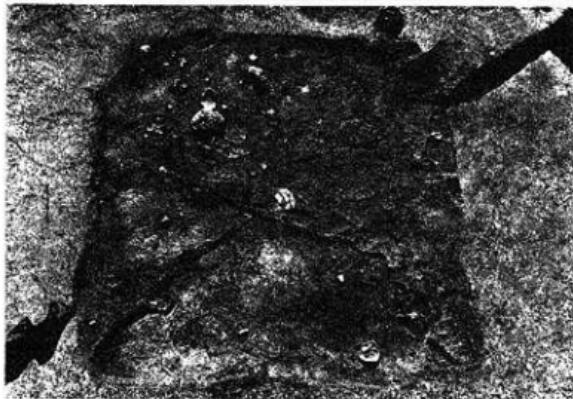
参考文献：県教委「宮城県文化財発掘調査略報」県文化財調査報告書40集—昭和50年—

### 住居跡出土の炭化材のC-14による測定の結果

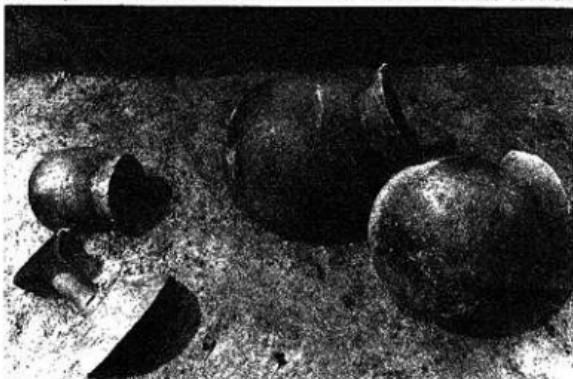
アイソトープ協会N-2308・C-14年代、 $1830 \pm 65$  (1770±60) 1年代は $^{14}\text{C}$ の半減期5730年（カッコ内はLibbyの値5568年）にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのぼる年数（years B. P）として示されます。



発掘区全景（北側より）



第1号堅穴住居跡  
(北庭より)



第4号くぼみ状遺構  
遺物出土状況

## (5) 八沢要害遺跡

(第2次調査)

遺跡所在地：栗原郡築館町沢字要害

調査期間：昭和50年4月7日～5月20日

調査面積：5,000m<sup>2</sup>

発掘面積：4,550m<sup>2</sup>

遺跡記号：CJ

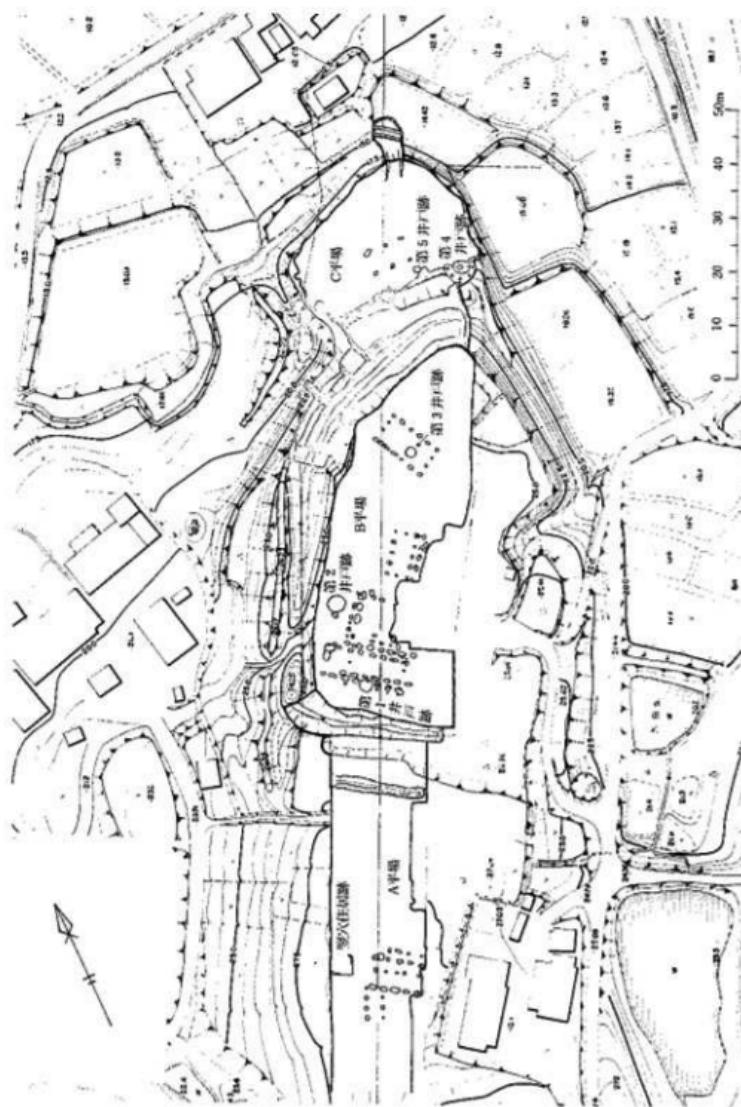
協力機関：築館町教育委員会

協力・参加者：金野 正（宮城県築館女子高等学校教諭）

佐藤信行（栗原郷土研究会会員）

佐藤正人（東北学院大学文学部聴講生）

通路地形全体圖



## 1 遺跡の立地

八沢要害遺跡は築館町の中心部より爾東約2kmの地点にある。小規模な八沢川沖積地に北向きにつき出た築館丘陵の一部である舌状台地上に立地している。なお、北向いの丘陵上には照越城、萩沢城などがある。

## 2 調査の概要

調査は昭和49年度に本遺跡の路線敷内約5000m<sup>2</sup>を対象として開始されたが、冬季の悪天候のため調査継続が困難になったので一時中断した。そして昭和50年度に調査を再開し、合わせて約4550m<sup>2</sup>を発掘した。遺跡は南北に三つの平場に分かれており(南から順にA、B、C平場とする)、その各々は空堀や段で区画されている。調査の結果、B平場を中心に下記の遺構および遺物が見された。

**掘立柱建物跡:** B平場では中央部を中心に多数の柱穴が検出され、現在まで6棟の建物跡が推定できる。それらは重複個所が多く、時期差が考えられる。その他、A平場では3棟、C平場では1棟が考えられる。

**土壘・空堀:** 土壘は基底幅約5m、空堀底部からの高さは約3mで、旧表土の上に厚さ約1.5mの盛土をして築かれている。この土壘はB平場西側を巡り、C平場と接する付近で消滅している。この部分の空堀内堆積土には、土壘を削平して埋めたとみられる土層があり、後世に工事が行なわれたものと考えられる。さらに、B平場の北側を巡る空堀の南側に幅1.5m・深さ0.7mの空堀に類似した遺構が発見され、その遺構は土壘よりも古い。またC平場の裾を巡る幅1m前後の空堀が発見された。

**井戸跡:** B平場で3基、C平場で2基検出された。平面形は径約2~3mの円形であり、深さ3~5mが一般的であり、なかには7mを越えるものがある。

**竪立住居跡:** A平場の南西部から平安時代の竪穴住居跡が1軒検出された。壁はほとんど削平されているが、わずかに残る周溝によって南北4m、東西3.6mの隅丸方形の住居跡と推定される。遺物は少なく、柱穴およびカマドは検出されなかった。

**出土遺物:** B平場建物跡の柱穴から江戸時代中期の染付磁器片が、C平場第5井戸跡からは漆器碗が出土している。竪穴住居跡からは、須恵器片、土師器片が若干出土している。

## 3まとめ

現在、文献その他を検討中であるが、遺構、遺物との関連や、A・B平場を区画する空堀やB・C平場を区画する空堀を意図的に埋めていることなどから、本遺跡は、中世(?)の遺構を継承した近世の屋敷跡と推定される。なお、本遺跡は南側において平安時代の集落跡である八沢遺跡と重複している。

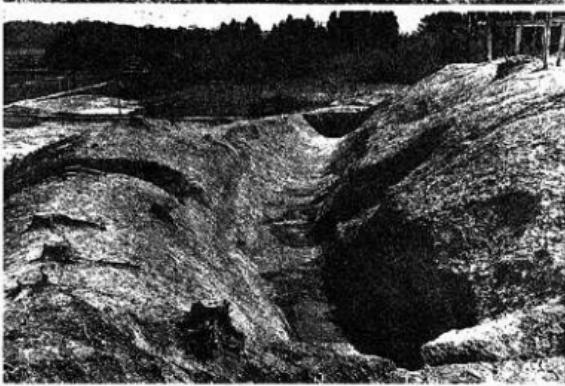
参考文献: 県教委「宮城県文化財発掘調査略報」県文化財調査報告書第40集—昭和50年—



造跡全景

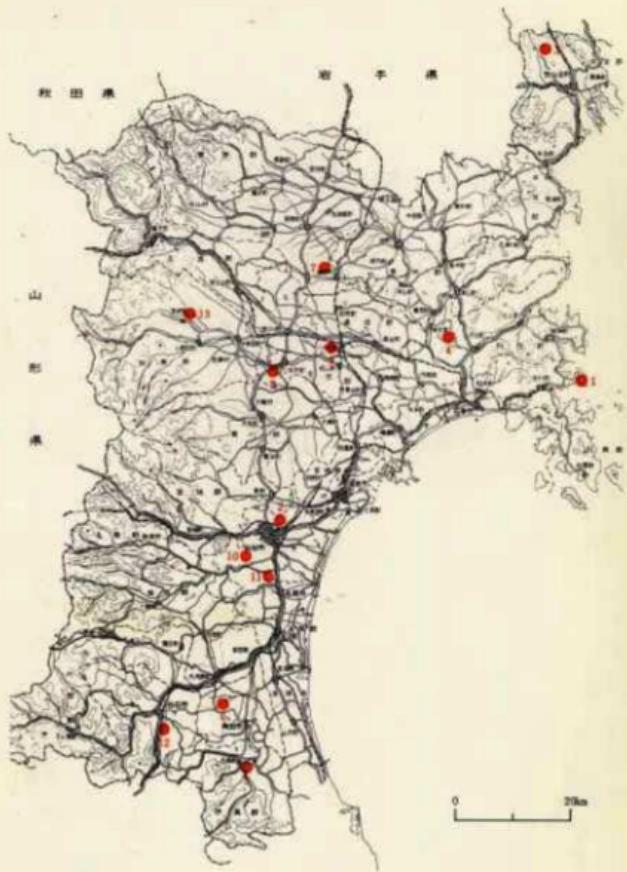


B 平場掘立柱建物跡群  
(南側より)



土堀・空堀(西側より)

### III 一 般 關 係 遺 跡



一般関係連絡位置図

## 調査遺跡

-昭和51年1月27日現在-

遺跡番号	遺跡名	所在地	原因	原因者	調査主体者	調査担当者	遺跡の性格
1	出島山下貝塚	女川町	学術調査		小牛田農林高等学校	加藤 辺見 朝高	縄文時代中期～後期の貝塚
2	大蓮寺窯跡	仙台市	学術調査		古窯跡研究会	加藤 度辺 孝伸	古墳時代の須恵器窯跡
3	原沢横穴群	気仙沼市	学術調査		気仙沼市教育委員会	奈良末～平安時代の北澤の横穴群	
4	桃生城跡	河北町 桃生町	学術調査		県教委	宮城県多賀城跡調査研究所	古代の城跡
5	宮ノ森遺跡	丸森町	学術調査		志賀 勝治	志賀 勝治	後期古墳 (横穴式石室)
6	柴原跡遺跡	角田市	学術調査		角田市教育委員会	角田市教育委員会	縄文時代後期～後期の集落跡
7	宮岩石遺跡	藤崎町	農道建設	個人	藤崎市教育委員会	三宅 宗義	平安時代の集落跡
8	青山横穴群	三本木町	土取り工事	個人	三本木町教育委員会	三宅 宗義	奈良～平安時代の横穴群
9	山前遺跡	小牛田町	住宅用地造成	小牛田町	小牛田町教育委員会	小牛田町教育委員会	縄文時代～古代にわたる集落跡
10	三神峯遺跡	仙台市	送電線鉄塔移転	東北電力	仙台市教育委員会	仙台市教育委員会	縄文時代前期の集落跡
11	安久東遺跡	仙台市	区画整理事業	仙台市	仙台市教育委員会	仙台市教育委員会	縄文時代～中世にわたる集落跡
12	車丁古墳	白石市	圃場整備事業	白南土地改良区	白石市教育委員会	白石市教育委員会	後期古墳 (箱式石室)
13	切込焼窯跡	宮崎町	開田事業	個人	宮崎町教育委員会	東北大学考古学教室、県教育委員会	近世の窯跡

※ No. 3・6・9・12 の遺跡は各市・町教委で報告予定(昭和51年3月刊)

※ No. 13 の遺跡は東北大考古学教室で報告予定

※ No. 12 の遺跡は、当初「板谷古墳」と呼んだが、今回「車丁古墳」と改めた。